

世界平和都市宣言四十周年 向日市平和と人権のつどい

戦後七十九年 教科書には載らない く私の経験した戦争く

語り部 廟嶺京都開拓団家族の会 黒田 雅夫

ファシリテーター 黒田 毅

※注意 すべて語り手からみた続柄となっています。

1. はじめに

雅夫さん：平和のために、何か一つでもお役に立ちたいと思い、私、黒田雅夫が経験した戦争について、「戦後七十九年 教科書には載らない『私の経験した戦争』」という

テーマで、息子の黒田毅と一緒に話させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

毅さん：経歴と簡単に内容をお話させていただきます。

父の雅夫は、昭和十二年に京都府亀岡市で生まれて、現在八十七歳になります。

雅夫の父親は既に二度、兵隊に行っていました。終戦の前年の昭和十九年に雅夫の父親が復員（軍務を解かれた兵が帰郷すること）した後に、雅夫と父親、母親、弟の四人で開拓団の一員として、船で満州へ渡ります。当時の雅夫は、小学一年生で七歳でした。

しかし雅夫の父親は、翌年の昭和二十年に三度目の兵隊となります。昭和二十年八月十五日の終戦からは、五月に渡満してきた祖父と、残された母親、弟との四人となり、逃避行が始まります。逃避行中の昭和二十一年一月に弟が中国人へ預けられ、祖父と母親は収容所で亡くなり、そして、雅夫は、戦争孤児として路上生活をおくり、昭和二十一年七月十日に小学三年の九歳でようやく日本の舞鶴に帰ってきます。

戦争では、原子爆弾や空襲、戦場で多くの人の命が奪われ、悲惨な出来事が多くありましたが、戦争が終わってから、多くの人が亡くなり、悲惨なことがたくさんありました。満州からの引き揚げも戦争が終わってからのお話で、終戦の直後からわずか八歳の雅夫が懸命に、生きのびて日本に帰ってくる、そんなお話です。

「戦争は大変だったんだ」で終わらずに、このお話を聞いて、「私だったら、この状況でどんな気持ちになるだろうか」、「もし僕だったらどうしていただろう」と、少し自分置き換え、想像力を働かせて聞いてみてください。

2. 満州の引き揚げとは

穀さん：満州はどこかご存じですか。満州は中国東北地方にありました。

満州の引き揚げとは、日本政府が満州移民を進め、満州へ行けば、作物も取れるし兵隊にもいなくてよいという話で、多くの人が満州に入植します。その数は、約二

十七万人、終戦時軍人を含めれば約二百二十万人が旧満州にいたと言われています。終戦後、その日本人たちは戦乱から逃げるため、一斉に日本へ帰国します。それを「満州からの引き揚げ」といいます。

引き揚げの途中では、ソ連兵や現地の人から襲撃や略奪を受け、そこから逃れるために集団自決をせざるを得なかった日本人もいました。ようやくたどり着いた収容所でも栄養失調、伝染病などで多くの人が犠牲になりました。

雅夫が所属していた廟嶺（びょうれい）の開拓団は、四国の開拓団とともに約五百名で日本へ逃げようとしていましたが、その途中で厳しい飢えや発疹チフスという病気で、三分の二の人が亡くなりました。

3. 船で満州に渡り、満州での生活

雅夫さん：昭和十九年に二回目の兵隊から帰ってきた父親と家族四人が船で敦賀から

北朝鮮の清津（チヨンジン）に渡り着いて、船の上から見たはじめての景色は、日本では見たことのない赤牛（茶色牛）と赤い山肌（赤茶けた山肌）が広がっていました。

ここで家族四人が揃って食べた「湯麺（タンミョン）」、こんなにおいしい食べ物があるのかと、今でもあの味は忘れられません。初めて満州の大陸に足を踏み入れた時の様子を描きました。

船や列車を乗り継ぎ、吉林省の廟嶺京都開拓団本部に到着しました。この村では、昼間は満州の子どもが豚の皮で作った鞭をもち、各家庭から集めた豚五十頭あまりを連れて放牧をしています。トーチカという城壁に囲まれたところで、村には井戸が二か所ありました。

夕方になるとオオカミの遠吠えが聞こえて、村外れの峠にオオカミが出ると学校が休みになることがよくありました。

一冬超した四月の終わり頃、祖父がわざわざ日本から私たち家族を訪ねてきてくれました。戦時中でしたが、空襲もなく、食べるものもあり、「祖父が来てくれて五月から種まきやら色々と人手がいるから助かるな」と父親はとても喜んでいました。

4. 父親の出征・日本の敗戦・襲撃・逃避行

雅夫さん：それから、一か月ぐらいたった六月の雨が降る日、突然、父親に召集令状「赤紙」が届きました。何も知らない私は、母親に「お父さん、どこ行くんや」と聞き、母親は「戦争や」と言っただけで、その時母親は泣いていました。

この時が、父親と母親の最後の別れとなりました。

穀さん：満州開拓員として戦争に行かなくてもよいはずだった雅夫の父親が、戦争末期、根こそぎ動員として、とにかく十五歳以上六十歳未満の男の人は全員兵隊ということ
で召集されました。

残されたのは年老いた雅夫の祖父、母親、八歳の雅夫と四歳の弟の四人で、農作業もできず、雅夫の母親はどんなに不安で心細い事だったことか。男手のない生活は大変苦しいものになりました。

雅夫さん：八月のある日、近くに住むおばさんが、「日本が負けるからソ連兵が攻めてくる」と家に飛び込んできました。満州の人たちの様子が変わったのは、八月九日にソ連兵が参戦した直後のことだったと思います。

そして、今から七十九年前の一九四五年（昭和二十年）八月十五日に戦争が終わり、日本は負けました。ここから、満州の人たちと私たち日本人の立場が逆転し、全土に渡って日本人が引き揚げようとします。身の危険を感じた私たちは、本部に避難しましたが、その夜中に村に火がつけられ、本部も襲撃されました。薄着の女の人が、鉋でお腹を突かれ、血が飛んだその悲惨な光景が今でも忘れられません。

その襲撃時に母親と弟と私の三人、カボチャ畑の葉の下に隠れました。その時に母親が「雅夫、えらいことや、枕の下にお金を置いてきて、それ忘れた。」と悔しそうに嘆いていました。

私たちはコウリヤン畑といって、穀物畑の中を見つからないように歩いて逃げました。私は弟を背負った母親と歩いていました。私の後ろには、道中で死んでしまった赤ちゃんをずっと背負う、ある母親の姿がありました。「もう少ししたら起きるから、

ゆすっている間は起きているから」と言って赤ちゃんを下ろそうとしました。他の人が赤ちゃんを引き離して土に埋めようとする、その母親は泣き崩れて、その場から動こうとしませんでした。その母親の様子は、見ていて本当にかわいそうで、今でも忘れられない出来事です。

穀さん：とにかくいつ襲撃されるかわからないので、逃げるのに精一杯で、自分のことで精一杯という状況だったそうです。

5. 劇場での出来事・収容所での生活・祖父、母親との別れ

雅夫さん：吉林省はとても大きな町ですが、夜通し歩き続けて兵隊の慰問の映画館みたいな芝居小屋に到着し、その芝居小屋に避難していましたが、五人一組となった機関銃を持ったソ連兵が、ドアを「バーン」と蹴って入ってきて、金品を奪い、女性はず

れていけます。言うことを聞かない場合は、機関銃で天井を撃つんです。私は、この時すぐに死に真似ができるようになりました。ソ連兵は、何人もの女の人をトラックに乗せて連れて行き、本当にかわいそうでした。

穀さん：開拓団の死亡者名簿があるんですけど、その名簿をみると、十代から二十代ぐらいの女性は行方不明と書いてありました。本当にひどい状況であったと思います。

雅夫さん：吉林省の駅から安全な撫順（ぶじゅん）に向かうため、無蓋車（むがいしゃ：屋根のついてない石炭等を運搬する貨物車両）に乗りました。無蓋車の真ん中は空いていて、どうして隅っこにいるかというと、隅で用を足すためでした。

穀さん：約一か月で移動距離は三百キロです。三百キロというと京都から広島ぐらいですが、少しの岩塩とコウリャン（穀物の一種）の配給だけだったので、体力がない人たちはどんどん亡くなりました。

ようやく収容所にたどり着きました。昭和二十年〰昭和二十一年の冬は、大変厳しい寒さで、食糧不足からの飢えや発疹チフスという病気などでたくさんの方が次々と亡くなる大変な収容所生活となりました。

雅夫さん：収容所に着くと、鍋として使う鉄兜とコウリヤンを大きな袋に一つずつもらいました。逃避行中、母親は弟を背負って無理をしたからか、収容所では寝たきりになりました。

私は、「おかん、どないしてコウリヤンを炊いたらええんや」と聞いたら、母親は「雅夫、この手首の下まで水を入れて炊いたらええしな」と言い、私は「わかった」と答えました。母親が「雅夫、うまく炊けたな」と喜んでくれました。私はその母親の笑顔がうれしくて、家族のために、鉄兜の鍋で一生懸命炊きました。

その後ろには、死体の山がありました。冬になり、気温が零下二十五度ぐらいだったので、死体は凍って埋葬できない状態で、山積みになっています。その山は三百五十人ほどで三段から五段はありました。私は、一メートル以上離れて死体の顔を見な

いようにして、誰も来ない安全な死体置き場の近くでいつもコウリヤンを炊きました。ここは、死体は冷凍、カチコチになっていて臭いも何もない。死体は、着ていたものは全部剥ぎ取られ皆裸で、うつす時は脇と足を持って放り投げられるので、お尻の方が先に上がって、顔はこっちを向いていました。もう絵にすることはできない悲惨な状況でした。

穀さん：遺体进行处理するすべがなかったので、日に日に遺体が多くなっていったと聞いています。寒くて、地面は凍って掘っても硬くて遺体を埋めることができずに上にどんどん積んでいくしかありませんでした。

雅夫さん：祖父は最期に「日本に連れて帰れへんで悪かったな」と私に詫びました。そして「雅夫、水を一杯くれ」と言って、私は「いいで」と水を一杯祖父に渡し、祖父は一口ほどの水を飲んで、「おおきに」と私に言って横にコトンと倒れました。それが祖父との最後の会話でした。

私がない間に弟を中国の人に預けたと、母親から告げられました。弟が預けられて間もなくして、寝たきりであつた母親が突然「今日はおかあちゃんがご飯炊く」と言うので、私は「なんでや、わしが炊くよ」と答えました。母親は、「雅夫、今日はおかあちゃんがご飯炊いたで」と、よろよろしながら、大根の長い根っこが一つだけ鉄兜の中に入つたコウリヤンを炊いてくれました。「今日は日本で言つたらお正月みたいや」と炊いてくれました。母親が「雅夫食べ」と言うので、「なんでおかん食べへんのや」と私は答えました。母親は一切食べずに、私にそのかやくご飯を食べさせてくれました。

その夜中に「雅夫起きっ、これ全部食べ」と、滅多に怒らない母親が真剣に怒つたので、私は全部平らげました。その次の日の朝方、私の身体にシラミが集まっていた身体も痒かったので、「おかん」と言つてポンと肩を叩いたら、コテンとひっくり返ってしまいました。それが母親との最後でした。

母親は、痩せこけてあばら骨が見えていました。私は、一人になったとき寂しくなるから顔を見ないようにしました。団長に「僕、おかんの足持て」と言われ、私は母親の足を持って団長と一緒にきつい階段を下りて運びました。

私はそこで「おかん、絶対わしは死なん！」と心に誓いました。

毅さん：実際の絵に描いてある雅夫の母親を運び出した収容所の階段は、日本人が建てたもので二十年前まで実際に残っていて、私は父と一緒に現地に行きました。見に行った時の収容所は学校として使われていました。

雅夫さん：母親を運び出して戻った時には、鉄兜も何もなく、「絶対に売られる」と思い、私はすぐに路上生活をすることにしました。

路上生活に入って、数日が経ったころ、中国人が「イーベン、シヨウジン、ライライ」と大きな声で何度も言って手招きもしていました。私は、「捕まえて売るつもりでは」と思いましたが、その人は、肉饅頭を犬の前に投げ捨て、そして私が近くに寄るとその落ちた肉饅頭を拾い手にのせ、何度もジェスチャーしていました。「シェイシェ、プヨ」とも言っていました。「一度落ちた饅頭、捨てたものだから、ありがとうはいらないよ。」と。そしてまた、肉饅頭をぽんと地面に投げてたんです。私はその饅頭をすぐ

拾い夢中で食べました。中国人のやさしき、命を救われました。

穀さん：その当時日本人は、高く売れたそうで、人を売り買いするということが普通になされていたそうです。今では本当に考えられません。

雅夫さん：何日か経ったある日、黒い服を着た女性が私に近づいて、私の前でひざまずき、目線を合わせて、ジェスチャーで腕を枕にする格好をしました。その女性が座っていることもあり、そして手をやさしく差し伸べてくれたので、すごく安心した私はその女性と一緒にについて行きました。着いた先は教会でした。そこにはご飯があつて、私と同じように親がいない子どもたちもいて、日本人の友達とも出会いました。教会では、「高巢のおばさん」が世話をしてくれました。

六月の終わり頃だったと思います。私たちは日本に帰れることになり、高巢のおばさんがリュックサックを作ってくれました。初めての贈り物だったので、今でも大切にしています。

6. 日本へ帰国・父親、弟との再会

雅夫さん：そして、船が日本のどの港に着いたか当時は全く分かりませんでした。日本に着いたことは分かりました。日本に着いて汽車に乗ったことは覚えていますが、

日本に着いて初めて停まった駅から、父親のふるさとである京都府亀岡駅が見えて、「あれ、お父さんの里や」と一緒に帰ってきた友達に言いました。そこで初めて京都に着いたことを知りましたが、ここで降りて父親の実家に帰っても身内がいるか分からなかった。高巢のおばさんについて行くことにしました。

当時のこの出来事を一緒にいた友達が覚えていて、その友達が自分の体験記に書いてくれていたのを偶然見つけ、六十四年ぶりに奇跡的な友達との再会につながりました。

毅さん：そして、雅夫は長崎まで行くことになりましたが、その途中の京都駅で、京都新聞の記者が子どもたちを取材してくれて、新聞に「黒田政夫」と「まさ」の漢字が間違っ

ていますが、名前が掲載されていきました。この記事をたまたま雅夫の叔父さんが見てくれていて、人違いかとも思いながらも、長崎の教会まで何日もかけて迎えに来てくれました。この記事を雅夫の叔父さんが見ていなければ、今、父も私もここにいないと思います。人生が変わっていたと思います。

雅夫さん：私は、京都新聞に行つてこの記事を確認し、自分が舞鶴に着いたのが七月十日で新聞に載つたのが十二日ということ、六十九年経つて初めて知りました。

八月に亀岡にようやく帰つて、父親の実家に預けられ、祖母に面倒を見てもらいました。私が夜中に泣き出すので、祖母に何度も医者連れて行つてもらうも、異常はありませんでした。どうやら、終戦当時の餓でお腹を突かれた女の人のことや、子どもが死んだことなど、満州でのいろんな苛酷だったことを思い出して、夜中に泣いていたようです。

毅さん：今は戦争PTSDと言われますが、父は当時戦争の後遺症があったと思います。

父は今でも少しの物音で目が覚めるそうです。

雅夫の父親は満州で兵隊に取られ生き別れましたが、シベリアに抑留された後、奇跡的に帰ってきました。すぐく運の強い方で、祖父は八十六歳まで元気に生き抜きました。

雅夫さん：父親がシベリアから帰ってきたときは、ヒゲを生やし狼の頭の帽子をかぶって、外套（がいう）を着ていました。「このおじさん知らないなあ」と初めは思っていました。田植えの手伝いに行っている時に、「お父さんだ！」と違って、やっぱり出しました。

弟の孝義は、四十三年ぶりに中国残留邦人として帰国し、東京の代々木で再開することができました。

父親と弟と三人並んだときに同じ眉毛で、「これはもう間違いない」と言われました。この眉毛のこともあって身内ということが分かって、すぐく嬉しかったです。三人同じ眉毛なので、眉毛は今も切らないようにしています。

また、母親が収容所で亡くなったのを知って土を被せてくれた同級生と七十九年ぶりに再会しました。

私は、母親の片目が見えなかったことを、帰ってから父親に聞きましたが、その友達もその事を覚えていました。当時の私は、夜のコウリヤン畑で母親に「雅夫、手をひいてくれ」と、よく頼まれるのは何故なのか分からなかったけど、今思うともっと良くしてあげられたのにとすごく残念です。母親は、片目が見えない状態で弟を撫順までおぶって、どんなに大変だったんだろうと思います。

穀さん：雅夫の母親は、小さい時に病気になり片目が義眼だったそうです。

父の雅夫は、心に残っていることを絵にしておたくさんの人に伝えたい、残しておきたいという思いから、クラウドファンディングでたくさんの方にご協力いただき、昨年の二〇二三年（令和五年）八月にDVD付きの本を完成させ、発行することができました。

父と父の弟さんは今も元気ですが、七十九年経った今も戦争は終わっていない。た

った二年の出来事です、今も苦しんでいます。

戦争は絶対起こしてはいけなくと改めて感じます。来年終戦八十年ですが、世界平和を願いながら、父もできる限り多くの人に伝えていきたいと思っています。どうかこのような体験をした人がいたということを知っていただき、この機会に平和のことについて考えていただけたらと思います。

雅夫さん：二年間の私の戦争体験を絵本にしました。描いた絵は六十枚以上になりました。戦争で亡くなられた方達のためにも、できるだけ、この体験を多くの人たちに伝えていきたいと思います。

本日は、本当にありがとうございました。

令和六年八月十七日